

第3回中国国際サプライチェーン促進博覧会を視察

本年7月16日～20日に中国・北京市にて開催された第3回中国国際サプライチェーン促進博覧会。これにあわせて松本正義会長が北京を訪問。博覧会会場を視察するとともに、その関連行事に出席した。今号では、第3回中国国際サプライチェーン促進博覧会の視察など、訪中時の活動を報告する。

今回の訪中の概要

7月15日～17日、松本会長は中国・北京市を訪問した。現地では、第3回中国国際サプライチェーン促進博覧会の前夜祭(15日)および開幕式(16日)に出席し、博覧会会場を視察。また、金杉憲治 駐中国日本国特命全権大使や本間哲朗 中国日本商会会長らを表敬訪問した。

中国国際サプライチェーン促進博覧会

中国国際サプライチェーン促進博覧会は、サプライチェーンを切り口とした世界初の国家レベルの展示会であり、習近平国家主席の肝いりで2023年11月に第1回が開催されている。松本会長が参加するのは、2024年11月に開催された第2回に続き2回目となる。

博覧会は「世界を繋ぎ、共に未来を創る」をテーマに掲げ、「先進製造」「スマートカー」「グリーン農業」「クリーンエネルギー」「デジタルテクノロジー」「健康生活」と、6つの産業チェーンごとに展示エリアが設けられている。それぞれのサプライチェーンの強靱化を視野にサプライヤーやバイヤーが集う場となっており、会期中には約20万人が来場した。

博覧会は、サプライチェーンにおける国際化、専門化、市場化、グリーン化の方向性を示し、川上・



開幕式に参加する松本会長

川中・川下の連携、大手企業と中小企業の柔軟な対応、産学界における研究と応用の協力、および中国と外国企業間のコミュニケーションを促進し、産業チェーンとサプライチェーンにおける国際協

力を深め、その安定と円滑さを維持・強化することを目的に開催されている。

主催国である中国は、この博覧会の開催を通じて世界的な貿易・投資の自由化・円滑化を進め、各国の産業融合をより秩序正しく、かつ効率的に推進することで、世界経済の成長と経済のグローバル化につなげていくという立場を示している。世界経済の発展に寄与するサプライチェーンを築く上で意義のある博覧会であるとみる企業も多く、海外出展者は回を重ねるごとに増加している。今回の博覧会には、75の国・地域から651社・団体が出展し、日本からは、住友電気工業、パナソニック、ダイキン工業、サントリー、ジェトロなどが出展した。

■ 前夜祭



前夜祭で祝辞を述べる松本会長

主催者である中国国際貿易促進委員会からの要請を受け、松本会長は前夜祭と開幕式に参加し、前夜祭では来賓を代表して祝辞を述べた。前夜祭・開幕式を通じて、日本からの参加者でスピーチの機会を得たのは松本会長のみであった。

祝辞で会長は、現在の中国と関西の強固な関係は、ビジネス交流の歴史という基盤の上に築かれていると述べた。また、パビリオン出展をはじめとする2025年大阪・関西万博への中国の協力や、7月に実施された関西財界トップと何立峰 國務院副総理との朝食会の開催などを例に、両者の関係の深化を強調した。さらに、博覧会が回を重ねるごとに重要性を増している点を評価し、祝意を表した。

■ 開幕式

松本会長は開幕式に主賓として出席し、式典後には展示場内を視察した。

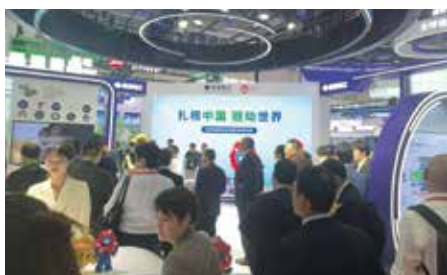
開幕式には、主催国のトップとして国際貿易・通商分野を担当する何副総理が参加し、中国指導部の肝いりの博覧会であることを内外に示した。また、海外からの出展企業を代表して米国エヌビディアのジェンスン・フアンCEOが登壇し、中国向け新型人工知能半導体の開発・投入方針を表明した。これまでも第1回はテスラ、第2回はアップルと、毎回米国大手の著名企業が参加しており、米中の通商問題が顕著になるなかでも、中国市場に根を張ろうとする米国経済界の動きと、それを受け入れる中国側の姿勢が顕著になっている。

そのほか、開幕式では南アフリカ副大統領、タイ商務省、中国英国商会の代表らが挨拶した。

■ 第3回博覧会から見たもの

今回の博覧会では出展企業の展示スペースが前回よりも洗練され、来場者も増えて盛況であった。通常、展示博覧会は回を重ねるごとに徐々に展示が洗練されてくるものであるが、本博覧会では3回目にしてかなり華やかで洗練された展示が目立った。

そして展示等は、あらゆる産業と人々の生活に直結するサプライチェーンの強靱化は企業にとって非常に重要であることをあらためて実感させる内容であった。世界の貿易体制が変化するなか、全世界をつなぐサプライチェーンの促進をテーマとする博覧会の開催意義は今後ますます大きくなると考えられることから、継続的な参加の検討が必要である。



展示スペースの様子

金杉駐中国日本国特命全権大使らへの表敬訪問

今回の北京訪問では、金杉駐中国特命全権大使や本間中国日本商会会長を表敬訪問し、意見交換を行った。

両氏からは、「中国と欧米の関係について、米中通商問題の最中、米国大統領がだれであっても厳しい状況が続くと中国側は見ており、淡々と対応している」との説明があった。その一方で、「中国は以前からグローバルサウスなど他の市場開拓に着手しており、日本も含めた各国との関係を安定化させようとしている」との言及もあった。また、中国はEUに対しても秋波を送っており、EUも中国との関係を安定させたいと考えてはいるものの、中国によるロシア支援や自動車輸出をめぐる課題などがあり、直ちに成果が上がることは期待できないとの見解が示された。

日中関係については、日本産水産物の輸入停止措置は一部解除されたが全面解除には至っておらず、日本産牛肉の輸入再開も待たれる状況のなかで、来年は日中韓サミットやAPECが中国で開催されることもあり、日本側としてもぜひともプラスとなる方向で臨みたいとの言及があった。また、中国によるレアアース輸出規制は継続しているものの、多くの企業に輸出許可を出しつつあるとの説明もあった。ただし、本年は戦後80年ということもあり、当面の日中関係には懸念材料もあるとの指摘があった。



金杉大使への表敬訪問

今後の関係深化に向けて

今回の訪中では、世界の貿易体制が変化する様相を見せるなかで、中国が広く世界とのサプライチェーン構築を求め、グローバル化を推進しようとする姿を目の当たりにした。

関西経済界としては、長年にわたり築いてきた中国とのビジネス交流における信頼関係を生かし、より広い視野で俯瞰して臨むことが一層重要となる。大阪・関西万博をはじめとする多くの機会を通じて、中国との相互協力を進めることが必要である。常にそうした視点を持ちながら、多方面で中国とのWin-Winの関係を築いていきたい。

(国際部 松園大)